

## フランス革命共同研究の方法と対象について

去年の最後の研究会のうちに申上げましたように、私は、「共同研究」の焦点をどこにしぼるか、どの点にとくに力をそそぎ、どの点を切りすてるか、それを全体としてとりきめることが、先決問題ではないか、と思います。しかし、この場合、こうした切りとりと切りすてを、対象に即して問題にするのか、それとも方法に即して問題にするのか、ということが明かにされねばなりません。これまでも、そうしたことがらについて、直接もしくは間接に討議されてきたとは思いますが、まだ、みんなの仕事の目安となるほどの、はっきりした線は、でていないように考えられます。

で、まづ、方法の問題から、検討をすすめてみたいと思います。

### 一、「共同研究」の方法について

「18世紀思想とフランス革命」というテーマは、思想の政治的エネルギーへの転化、の典型的な実例として考えることができます。したがって、その研究の方法としては、さしあたり、こうした「転化」のダイナミズムの究明を主題としているマルクス主義の方法を参照することが考えられます。しかし、その場合に、次の点を念頭におかねばならないと思います。つまり、マルクスの仕事は、思想と政治の関係よりは、政治と経済の関係の究明に集中されたし、後継者たちの仕事も、思想史の分野ではまだ未解決の問題を沢山のこしていること、それに、マルクス史学における思想史のとりあつかいは、すくなくともこれまでは、経済的もしくは政治的條件がいかに思想を規定するか、という点に関心を集中して、逆に、思想が経済的もしくは政治的な過程にたいして、いかにたらきかけるか、という点を、方法論のうえでも、仕事のうえでも、充分明かにしていないのではないか、ということ。

18世紀思想とフランス革命の関係を、思想がいかにして政治的エネルギーに転化するか、という一般的な問題の形におきかえて、これを、唯物史観における上部構造と下部構造の関係の規定した公式にあてはめてみますと、一應、次のように図示できると思います。

#### 【図1】

18世紀思想の位置が、フランス革命より上にあるのは、前者が上部、後者が下部構造（もちろんそうは割切れない要素をふくんでいる訳ですが、一應、これを政治過程に局限してとらえてみます）に対応することを示し、18世紀思想の位置が、フランス革命のま上ではなくて、すこし左にづれているのは、前者が後者に対して時間的に先行することを示しています。なおベクトルで示した $\vec{a}$ は、18世紀思想のフランス革命に対する規定作用を示しています。

しかし、この図式は、次のように改造すれば、方法の地図としては、一そう役立つようになると思います。

## 【図 2】

18 世紀の「哲学者」や「経済学者」たちの思想は、革命指導者たちの思想を媒介として革命のエネルギーに転化したものと考えられますから、 $\bar{a}(A \rightarrow B')$  は、 $\bar{x}(A \rightarrow A')$  と  $\bar{z}(A' \rightarrow B')$  とに分解して考えることができる訳です。この場合、媒介者としてさしはさんだ  $A'$  は、 $A$  からと同時に  $B$  からも規定をうけると考えられます。 $\bar{y}$  は  $B$  の  $A'$  に対する規定作用を示す訳です。革命家のなかには、はじめネズをまいた方向に眞一文字にすすんでゆく型と、状況に即して柔軟にフィード・バックを示す型があつて、後者の場合には、革命の過程からの照り返りが重大な問題となるのですが、これは更に立入った課題として、さし当り、視野のそとにおくことにします。

さて、このように、はじめの問題をバラしてみますと、私たちの「共同研究」のテーマは、これを 3 つのラインに大きく整理することができると思います。

### (一) $\bar{x}(A \rightarrow A')$

18 世紀の哲学者たちの思想 ( $A$ ) と、革命指導者たちの思想 ( $A'$ ) の関係。

### (二) $\bar{y}(B \rightarrow A')$

アンシャン・レジーム末期の社会 ( $B$ ) と、革命指導者たちの思想 ( $A'$ ) の関係。

### (三) $\bar{z}(A' \rightarrow B')$

革命指導者たちの思想 ( $A'$ ) と革命 ( $B'$ ) との関係。

### (N.B.)

「革命指導者たちの思想」というのは、もっと広く、「革命を推進させた思想」とした方が一そう適切だと思うのですが、そこまで広げると処理しにくくなると考えて、便宜上、範囲をしぼった訳です。なお、上の図式について、 $B$  と  $B'$  の関係が当然とりあげられねばならない訳ですが、私たちのテーマと思想史の角度からとらえるという立前にたって、これを主題的にとりあげることはさしひかえた次第です。

(一)  $\bar{x}$  と (二)  $\bar{y}$  は、「いかにして革命思想が生れたか」の問題にかかわり、 $\bar{x}$  はとくに「理論」から、 $\bar{y}$  は「経験」から、の面にかかわるものと考えられ、(三)  $\bar{z}$  は、「いかにして革命思想が革命行動に転化したか」の問題にかかわるものと考えられます。

### (N.B.)

論理学的角度からすれば、 $\bar{x}$  のプロセスでは“deduction”の問題（とくに広いイミの公理論と誤謬論）が、 $\bar{y}$  のプロセスでは“abduction”、 $\bar{z}$  のプロセスでは testing というひきしぼられてイミでの“induction”の問題が、クローズ・アップされると思います。

$\bar{x}$ ,  $\bar{y}$ ,  $\bar{z}$  は、純粋な形で分解できる訳ではないし、私たちの仕事のプロセスでも、これらをバラバラにコリツさせてとらえることは事実上不可能であり、できるだけ、これらを  $\bar{a}$  とい

う全体の見地から、相互關連的にとらえる努力をすべきだと思うのですが、すくなくとも、予備段階として、問題を一應うえのようにときほぐして、分析的に處理するプロセスをおいた方がよいのではないか、というのが、私の意見です。

えは、従来、伝統史学の立場からする思想史において、これのみがきりはなされて追求されてきました。家永さんの仕事などには、そうしたかたむきが、いまだにつよくのこっているのではないかと思います。

また、マルクス史学は、思想史のとりあつかいにおいて、 $y$ に重点をおいてきたといってもよいと思います。

私たちににとって大切なのは、  
第一に、 $x$ と $y$ をないあわせてとらえる努力をすること。(たとえばルフェーブルの『デカルト』や『パスカル』などでは、この点について、これまでにはマレな成果が示されているように思われます。)

第二に、これまでの思想史学においてウィークだった $z$ を、できるだけ科学的、客観的な仕方で明かにすること。とくに、この二つの点ではないかと思います。

第一の点は、そうした方法意識さえシャープにもっていれば、手續のうえでは、いろいろこれまでの業績を参考にすることができると思うのですが、第二の点は、そういう訳にはゆきません。 $z$ の究明については、すくなくとも私のしるかぎりではまだたしかな方法がみつげだされていないし、参照できる仕事もすくないからです。私はそこで、 $z$ の分析に関する、一つの試案をだしてみたいと思います。

私は、 $z$ においては、communication の問題が、一つの、大切な役割をもつと思います。Cybernetics (Communication と control の研究) の研究者たちが普通つかっている com. 図式を用いて、問題点を明かにしてみたいと思います。

### 【図 3】

いまかりに、Information Source を、「革命指導者の思想の総体」(A') に対応させて考えます。そうすれば、Message は、そうした思想の総体のうちから、ある伝達目的のためにえらびだされた「特定の主張」に対応すると思います。たとえば、「三部会を召集しろ」とか、「王の拒否権はみとめない」など。次に、Transmitter は、思想のもちぬしが、自分の思想の総体からえらびだした特定の主張を表現するために用いることのできる「表現技術」に対応し、Signal は、Message の Trans.による「表現様式」、つまり、Message の記号化されたもの、(演説、新聞、パンフレット、絵画、芝居、歌謡、単行本、etc.) に対応します。Noise Source は、議場のヤジ、政府の言論ダンアツ、など、「Signal の伝達をはばむもの」、Receiver は、signal の受け手が、signal をてがかりとして、発信者の「Message を読みとる技術」、たとえば民衆の文字をよむ能力など、次にでてくる Message は、受け手が受信された signal をてがかりとしてよみとる思想、Destination は、受け手、たとえば民衆に対応します。よみとられた Message は、受け手の思想の総体にはめこまれることによって、特定のイミをもつ、つまり、独特な仕方で解釈される、と考えられます。

ここまでのプロセスが、普通の communication 論の問題になる訳ですが、 $z$ の分析は、このプロセスの終点と大衆の革命行動の関係をもふくめて、問題にする訳です。ともかく、com.論の見解を活用すれば、 $z$ の分析にあたって、A'とB'の関係をいきなり問題にするのではなく、両者の中間にいくつかの媒介項をはさんで考えることが可能になるので、操作が割合容易にかつ客観的になるのではないかと、思われます。

(N.B.)

$x$ と $y$ の分析は、以上に説明した com.プロセスの始点にあたる Information Source の分析に帰着する訳です。

なお、 $z$ の分析は、ひとたび以上に例示したような com.プロセスの分析におきかえられれば、従来の com.論で明かにされてきた Control Analysis, Content Analysis, Media Analysis, Audiance Analysis, Effect Analysis などに、分解してとりあつかうことができるのは、云うまでもありません。

以上の、きわめてあらっばい、しかもあまりにも図式的な説明は、私たちの「共同研究」の方法を考えるのに、それほどタンになるとは思えないかもしれませんが、私にとっては、すくなくとも、次の点だけは、これによって明かになったのではないかと、思います。つまり、

『18世紀思想(A)とフランス革命(B')の関係( $\alpha$ )を明かにするには、両者(A, B')の媒体として革命指導者の思想(A')をはさんで、両者の関係( $\alpha$ )を $x(A \rightarrow A')$ 、 $y(B \rightarrow A')$ 、 $z(A' \rightarrow B')$ という3つの関係に分解してみることが、すくなくとも予備的段階として、のぞましいのではないかと。

なお、 $x$ 、 $y$ 、 $z$ の分析は、communication論の角度から、総合的にとらえることが可能になるのではないかと。』ということ。

これで、唯物史観における上部-下部構造の関係についての公式を、一應、仕事のしやすい形におきかえる手がかりについて私の意見のあらましをのべおわりましたので、こうした案を、もっと具体的に、私たちの「共同研究」にすぐ適用できるような形にくみなおしてみたいと思います。

そのためには、どうしても、研究にあたるメンバーの主体的条件、たとえば専門分野、現在の主要な関心、エネルギー投入可能量、パースナリティ、メンバー内の人間関係、年齢配置、職業配置など、を慎重に吟味しなければならない訳ですが、ここでは、こうした準備が充分ありませんので、一つの便法をもちいることにいたします。それは、おそらくは上にあげたような諸条件に規定されながら、ほぼ自然発生的な仕方であらわれてきた、いくつかの小グループを、その予想される機能と相互関係について検討する、ということです。その結果、をまとめてみますと、次のような図式にあらわすことができます。

【図4】

この図式は、うまく現実にあっていないかもしれませんが、年末に、多田、樋口両君と検討した結果です。全体としてみれば、先生が司令官、河野さんが副官、樋口さんが連絡将校、といった役割を果しているといえるでしょう。これが、大体、私たちのチームの編成だと思います。

さて、このように、きわめて大まかにとらえた主体的条件を念頭においた上で、上にスケッチした方法に関する試案を、より具体的に、すぐ使えるような仕方に、くみなおしてみたいと思います。

説明の便宜上、省略符号を用いたいと思いますので、一度かいた図式を、もう一度かきなおしておきます。

#### 【図 5】

まづ、A'の成立条件を究明する $\bar{x}$ と $\bar{y}$ の分析についてですが、それには、広いワクで、アミをうつようにしてとらえる「巨視的」な方法と、一本釣やザルですくうような「微視的」な方法が考えられます。前者は **explanational**、後者は **discriptive** な性格をもつと考えてもよいと思います。このような前提をもうければ、さし当り、 $\bar{x}$ と $\bar{y}$ の、それぞれの「巨視的」な分析を担当するにふさわしいグループを、私たちのチームのなかに見いだすことができると思います。つまり、

〔I〕  $\bar{x}$ の巨視的な分析は、主として野田グループ、

〔II〕  $\bar{y}$ の巨視的な分析は、主として河野グループ、

がそれです。

$\bar{x}$ の巨視的な分析〔I〕においては、A'における宗教観、君主観、民衆観、歴史観、価値観、などをとりだして、Aとの関係を明かにすることなどが主な仕事となるでしょうし、

$\bar{y}$ の巨視的な分析〔II〕においては、Bの生産関係、階級構成、階級闘争、農業問題、政治機構などと、A'との関係を明かにすることが期待されます。

こうした巨視的な分析とならんで、『ルソー研究』以来とりいれてきた新しいアプローチは、 $\bar{x}$ と $\bar{y}$ の微視的な分析を可能にすると思います。

その点について、まづ大まかなメドをたててみましょう。

A'の分析をおこなう場合に、私は、すくなくとも次の4つのファクターを考慮に入れる必要があると思います。つまり、

(i) 教養 (culture)

(ii) 社会的地位 (social status)

(iii) 幼時体験 (early learning)

(iv) 気質 (temperament)

がそれです。

(N.B.)

(i) < (iv) ……個人的・生理的・基底的・コントロールしにくい・与えられたもの。

(iv) < (i) ……社会的・文化的・表層的・コントロールしやすい・獲得するもの。

(i) と (ii) のファクターは、それぞれ  $\bar{x}$  と  $\bar{y}$  の巨視的な分析に容易にかみあいますが、(iii) と (iv) は、独自の微視的方法によって処理されねばなりません。これは、今西グループにふさわしい仕事だと思います。しかし、実際に仕事をすすめてゆく上では、「革命指導者たちの伝記の作成」という作業目標のもとに、野田グループ ( $\bar{x}$  の巨視的な分析) と河野グループ ( $\bar{y}$  の巨視的な分析) の仕事を背景としながら、(i)、(ii)、(iii)、(iv) のファクターをないあわせる、総合的、造型的な仕事が必要になってくるのではないかと思います。

以上、整理しますと、

〔I〕  $\bar{x}$  の巨視的分析……野田グループ

〔II〕  $\bar{y}$  の巨視的分析……河野グループ

〔III〕 (iii)、(iv) の分析……今西グループ

〔IV〕  $\bar{x}$ 、 $\bar{y}$  のからみあいの微視的分析……伝記グループ

という 4 つの仕事の単位と、分担グループが想定される訳です。

従来、マルクス主義史学においては、思想成立についての微視的分析が不十分だったのではないかと私は考えています。これに対して、私が「新しいアプローチ」というコトバをつかうときに暗黙のうちに想定していたアメリカ的な方法においては、微視的分析にかたむきすぎて、それと巨視的分析とのかみあわせ、とくに〔II〕にあたる仕事とのつながりが、不十分だったのではないかと思います。

したがって、 $\bar{x}$  と  $\bar{y}$  の分析において、巨視的方法による仕事を背景としながら、総合的な仕方で微視的な分析をおこなう〔IV〕のような仕事は、私たちの「共同研究」の独自性を発揮するために、かくことのできない役割を果すものと私は思います。この仕事においては、説明的な科学的方法と、人間に密着した記述的な文学的方法とが、しっくりむすびあわなければならないと思います。

のこるところは、 $\bar{z}$  ( $A' \rightarrow B'$ ) の分析です。つまり、「いかにして革命家たちの思想が、革命のエネルギーに転化するか」という問題です。

私の見るところ、 $\bar{z}$  の分析においては、**control** と **communication** の問題が中心になるのではないかと、いう気がいたします。いまのところ、樋口グループは **control** の分析に力を集中していますし、多田グループは **communication** 分析をテーマにかかっています。いずれのグループにも、前川・豊田・会田渚氏のバック・アップが必要だと思います。それに、**control** 分析には、政党や集団の性格分析という形で、清水グループの協力が考えられますし、**communication** 分析における Audience Analysis には、どうしても河野グループの協力が必要だと思います。

以上で、大体、私の方法試案にもとづく、仕事の分担を検討しおわった訳ですが、その結果、すでに列挙したもののほかに、

〔V〕  $\bar{z}$  の **control** 分析……樋口・清水グループ

〔VI〕  $\bar{z}$  の **communication** 分析……多田グループ

という 2 つの仕事の単位と分担グループが想定される訳です。

〔V〕の仕事は〔IV〕(伝記グループ)の仕事と密接な関係をもちます。なぜなら、〔IV〕で彫りだされた革命指導者たちの群像が、〔V〕によって、敵対したり協力したりするいくつかのグループのメンバーとしてとらえられるからです。もちろん、〔IV〕の仕事の過程でも、革命指導者間の相互関係が問題にならない訳ではありませんが、視点はあくまでも微視的であり、どちらかといえば個人中心的であります。〔V〕では、しかし、人間関係が主題となります。たとえば、ジャコバン・クラブを中心として、左に「コルドリエ・クラブ」、パリの「コンミュン」、右に「1789年の会」、「フィヤン・クラブ」などの内部構成とグループ相互の関係、などが明かにされねばなりません。

〔VI〕の仕事は、〔V〕と同じく、〔IV〕をかくことのできない前提といたしますが、とりわけ〔V〕とふかい関係をもっています。前川さんがかつてAとB'の関係を主題としてコミュニケーション分析をこころみられましたが、以上のような協業を前提とすれば、あの仕事も、もっと生きてくるのではないかと思います。

以上、大変ひとりよがりな意見になったのではないかとおそれますが、私たちの「共同研究」をすゝめてゆく上に必要と思われる方法の問題を、あらかじめ検討しておきましたので、次に、研究対象の問題にうつりたいと思います。

## 二、「共同研究」の対象について

方法の問題を検討するおりに、おのづと対象の問題にもふれてきた訳ですが、ここでは、後者を主題的に検討してみたいと思います。

もし伝記グループ〔IV〕の仕事が、一方では革命思想の成立条件の分析( $\bar{x}$ と $\bar{y}$ の分析)と、思想の政治への転化の分析( $\bar{z}$ の分析)を媒介し、他方では巨視的方法と微視的方法(とくに $\bar{x}$ と $\bar{y}$ の分析について)をかみあわせる役割を果すものとするれば、この仕事を充分になしとげる必要によって、対象(私たちの研究にとっては、18世紀後半のフランスの歴史)の時間的上限がきめられてくると思います。なぜなら、〔IV〕においては、革命指導者たちの育った時代的背景が明かにされねばならないからです。こうした観点から、対象の時間的上限をもとめれば、だいたい1740年ごろが適当と考えられます。

(N.B.)

1740年といえば、だいたい「哲学者」たちが活動をはじめるところにあたっています。

(ポンポドゥール夫人が勢をふるったのが1745~64。

マールゼルブが出版活動を大目にみたのは1750~65の期間です。)

もし上限を1740年ごろにとるとすれば、モルネの『フランス革命の知的起源』が、とりあえず野田グループ〔I〕の消化と克服の対象になるはずです。

次に、対象の時間的下限をどこにもとめるか、という問題の検討にうつります。

これまでの討論では、テルミドールの反動まで、つまり 1794年の夏まで、ということになっていましたが、私は、この冬休にやった仕事の結果、ブリュメール 18 日のクーデタまで、つまり 1799年の冬までとった方がよいのではないかと考えるようになりました。その理由はいろいろありますが、とくに指摘しておきたいのは、次の 3 つの点です。

(一) シェーエスにからんで。

ミラボーと共に「三部会」を革命の司令部に転化させたシェーエスは、「王の逃亡」(1791・6・20)のころから責任のある仕事をさけて舞台ウラにしりぞいていたのに、テルミドールの反動(1794・7・27)を機として再び活潑な動きを開始し、やがてナポレオンと手をたづさえて、議会の機能をマヒさせ、革命を葬りました。シェーエスは、「哲学者」と「革命家」たちのカケハシとして最も大事な人物の一人ですから、彼の革命において果たした役割を明かにするためにも、ブリュメール 18 日を下限とするのがよいと思います。

(二) ナポレオンにからんで。

ナポレオンとフランス革命の関係は、ビスマルクと二月革命の関係とともに、独裁主義と民主主義の関係について大事な問題を提起していると思います。ナポレオンがブリュメール 18 日に舞台にのぼるまでに、総裁政府は、ブルジョア政権を確立するために、7月14日(バスチーユ占領)や6月2日(ジロンダン追放)の場合のように、人民の力をかりるのではなく、軍隊の力によって、9月4日(王党オイダシ)や5月11日(ジャコバン派オイダシ)のクーデタをやっています。したがって、ナポレオン出現の条件を明かにするにはテルミドール政権の時期を切りすてる訳にはゆかないと思います。

(三) バブーフにからんで。

バブーフがフランス革命からどのような実験的教訓をひきだし、それによって社会思想をどのように発展させたか、ということは、こんどの研究でどうしてもおさえておきたい点です。なぜなら、それはルソーの思想→フランス革命→バブーフの思想→2月革命マルクスの思想、といった一連の、思想と政治の相互媒介的な発展過程を明かにする重大ないどぐちになると考えられるからです。マルクスの思想の成長にとって2月革命にたいするコミットメントの果たした役割にほぼ対応するイギを、バブーフのフランス革命にたいするコミットメントは、もっていると思います。ところで、そのことは、テルミドールの反動以後に起こっているのです。

主な理由は以上の通りです。

したがって、私は、私たちの「共同研究」の対象の時間的なハバを、1740年代のはじめから1790年代のおわりまでとするのを適当と考えるのです。

これで対象のワクについての検討をうちきり、次にその内容の検討にうつりましょう。そのためには、次のような図表を、案内地図のかわりに用いるのが便利だと思います。

【図 6】

この図表は、冬休みに、手持ちの参考文献をたよりにすこしくわしい年表をつくって見て、そこからひきだしたスケルトンです。革命以前の部分はしらべる手がかりがなかったのではぶきました。それに、政治的な面だけしかとらえられていません。つまり、(一) 革命の諸段階の推移。それに対応する (二) 立法機関と (三) 行政機関の形態の推移。それらによって規定される (四) 政体の推移。それぞれの政治的段階における (五) 指導的革新家。などをそれは示しているにすぎません。

以下、この図表を手がかりにして、いくつかの論点をひきだしてみましよう。

(一) 革命の諸段階の推移のダイナミズムについて。

アンシャン・レジーム末期における財政問題は、あらゆる革命の要因の一つの集約点として、つまり革命のテコとして、重大なイギをもつと思います。テュルゴーやネッケルなどの改革は、幕末の寛政・天保の両改革に共通な特徴、つまり、封建的反動（王権もしくは幕府権力の強化）と新事態（商品経済の発展など）への適應という両面、をもっています。こうした特徴が、いかに革命の条件に転化したか、という点が、まづ起点としておさえられねばならないと思います。

徳川政権の場合、危機が最後の段階で対外問題（外圧）によって激化され、そのために革新派をただちには反幕・反専制の方向にはおもむかせないで、さしあたり、攘夷の方向にひきつけました。しかし対外問題の処理をめぐる阿部正弘が皇武合体・雄藩合議の線をうちだしたことで、カロンヌが名士会を召集して（1787・2・22）財政改革の助力をこうたことは、徳川幕府、ブルボン王朝という専制権力の崩壊の直接的な手がかりとなった点で、共通な歴史的イギをもつものと云えるでしょう。阿部正弘の處置が「公家の政治関与、雄藩の中央政界進出、處士横議の端をひらく結果となり、幕末政争の禍根となった。」（遠山『明治維新』p.82）といわれるように、カロンヌの名士会召集は、三部会召集の決定（1788・8・8）にまでおいこまれる、貴族対王権のはげしい一聯の闘争のキッカケとなり、しかも貴族は反専制の旗印のもとにブルジョアと手をむすんだために、ブルジョア革命のさそい水ともなった訳です。

アナロジーをもう一コマ先まですゝめてみましょう。名士会召集から三部会召集決定まで（1787・2・22～88・8・8）は、貴族の指導のもとに、貴族とブルジョアの同盟が成していました。しかし、パリ高等法院が、「三部会は 1614 年の形式どおり構成される」と発表した日（1788・9・25）から、この同盟はやぶれ、貴族対ブルジョアの闘争が表面化しました。「公衆の論議は一変した。国王・専制主義・憲法はもはや第二の問題で、第 3 身分と他の 2 つの身分の闘争となった。」とマレ・デュ・パンはかきました（89 年 1 月）。これに対応する転機を、幕末の歴史においては「寺田屋の変」（1861）にみいだすことができます。これは、反幕勢力の内部矛盾の表面化であり、「上層公家と藩主・上士勢力」が「下層公家と下士勢力」に対してこころみた最初の挑戦であります。久坂玄端が、土佐の武市瑞山にあって、「諸侯たのむにたらず、公家たのむにたらず、草莽志士糾合義挙のほかにはとても策もこれなきことと、私ども同志中申し合せおり候。」と書いたのは「寺田屋の変」の翌年正月

(1862) のことでした。井上清さんによれば、「寺田屋の変の後には、・・・この態度が志士の基本方針」であったといわれます。

こうした階級闘争の展開のプロセスは、革命家たちの思想の発展のプロセスと深い関係をもつと思われまますので、シャープな問題意識のもとに相当つっこんで追求する必要があるように思われます。

まづ旧制度の中枢をなす幕府権力や王権に対抗して、雄藩諸侯や貴族を前衛とする権力闘争が開始され(そのスローガンは日本の場合は「尊王攘夷」、フランスの場合は「反専制」)、それによって権力のタガネがゆるんだところで、保守特権層と革新層との全般的闘争に転化する。しかも、この闘争段階においてすら、革新側は、特権階級下層(フランス革命の場合は貴族のミラボーと僧族のシェーエスなど、明治維新の場合は下級武士)の指導や協力を必要とする、といった点など、大事な論点としてあげることができます。

## (二) 国際(対外)問題の国内問題への転化のダイナミズムについて。

アンシャン・レジーム末期における、7年戦争(1756~63)とアメリカ独立戦争(1775~81)への参加は、とくに、「対外問題がいかにして国内問題に転化するか」(当面の問題になっているフランスの場合についていうと、こうした戦争への参加が、財政危機や物價トキなどを媒介として、いかに国内の階級闘争を促進したか、という形になります)という点に問題意識をひきしぼって、従来おこなわれてきたよりは深いほり下げをやってほしいと思います。私たちは、明治維新について、外圧と国内問題との関係にかんする貴重な討論記録を資本主義論争の発端以来チクセキしてきている訳ですから、これを革命史の分析に生かさないと手はないと思うのです。フランスの場合は原始蓄積もかなりすゝみ、マニュファクチュアも高度にすゝんでおり、革命条件の内部的成熟が十分にみとゞけられるために、原蓄が貧弱でマニュもほとんどみるべきものがなく、こうした内部的条件の未成熟なまゝに、あきらかにヨーロッパ先進資本主義諸国の外からの圧力を大きな起動力として封建体制の変革をおこなった日本の場合にくらべると、対外関係は、すくなくとも革命の前史に関するかぎり、それほど重要なイギをもたないかもしれません。フランス革命と明治維新とでは、国際的要因と国内的要因の比重はほとんど逆になっているからです。したがって、それぞれの国の伝統的アカデミー史学が、弱い方の要因をほとんど無視して、正しいイミにおける両者の相互関係を十分にハアクしそこなってきたことは、あるいはムリのないことかもしれません。しかし、日本では、昭和の初年以来、マルクス史学によって、マニュファクチュア問題を中心に、維新変革の内部的条件の研究がすすめられてきて、戦後にいたっては、そうした内部的条件と外部的条件(外圧)との相互関係が、重要な論点の一つになりました。(マニュファクチュア問題の最近の学問的水準を代表してきた藤田五郎氏が、明治維新の研究は「国際関係の分析視角からなされるとき、はじめて正しい方法のうえに据えられることになる」という見解に到達し、「従来の幕末一維新の経済発展段階規定論から解放される必要がある」と強調するにいたったことは興味深いこと

です。明治維新を外圧のために早熟的に封建体制のカラをやぶった変則的なブルジョア革命としてとらえる新労農派のグループは、最近の共同著作『日本資本主義の成立』・東大出版会・1954.11 のなかで、「かつてのマニファクチュア論の展開にさいして、国際的環境がかんたんに忘れ去られ、国内的視野にのみこりかたまりすぎた行過ぎをここでふたたびくり返してはならないのではなかろうか。」(p.127) といっています。) こうした問題意識は、方法の観点から重要であり、私たちの研究においても、十分に生かされねばならないと思います。

フランス革命史研究の場合についていえば、従来、閑却されがちであった国際問題（とくに革命前史の場合）を国内問題との相互関係において、正しく評価しなおす必要があるのではないかと思うのです。

フランスは、たしかに、私たちにとっては先進国であり、幕末の外圧の一翼に加わった国であります。しかし、イギリスに対しては明かに後進国であります。第一に、ヴォルテールの『イギリス便り』(1734) あたりをカワキリにはじまる「哲学者」たちの思想活動は、あきらかに、イギリスの政治革命とそこから生れた政治思想や人生論にシゲキされたものと考えられます。第二に、イギリスの王権に対抗する新大陸におけるイギリス植民地の革命、すなわちアメリカ独立戦争(1775~1781)のフランス革命にあたえたエイキョーは、イギリス啓蒙思想の場合よりも、はるかに重大で、かつ直接的だった、といわねばなりません。これは、イギリスにおける第3の民主革命とみてもよいのではないのでしょうか。第三に、イギリスにおける産業革命のフランス革命に与えたエイキョーを考えてみる必要があるのではないのでしょうか。明治維新における外圧の内容は、本質的には産業革命によってヒヤク的に増大したヨーロッパ諸国とアメリカの生産力であります。それが現象的に黒船(工場のキカイをうごかすのと同じスチーム・エンジンで走る船)としてあらわれたにすぎません。黒船の威力にクックしてついに幕府のテイケツした日米通商条約(1858)が、物價トーキ、国民下層の生活困窮、などを媒介として、いかに強力な変革の促進剤になったか、ということをする私たちとしては、たとえ相当な割引をして考えるにしても、アンシャン・レジーム末期における、イギリスとの自由通商条約テイケツ(1786)がフランス国内に与えたエイキョーを重視しない訳にはいきません。一歩先に産業革命の過程に入ったイギリスと当時のフランスの生産力の落差によってひきおこされた旧体制の破壊作用は、みとどけるカチのある歴史的現象だと思います。

つまりフランス革命の前史に関するかぎり、対外問題は対イギリス問題に集約される訳ですが、そこには、すくなくとも以上に指摘したような三つの論点がはらまれていると思うのです。これを図式的に表現すれば、次のようになると思います。

#### 【図7】

(N.B.)

アメリカ独立戦争は、7年戦争から尾をひく対英憎悪と、啓蒙思想にもとづく専制反対(この場合は、イギリス君主の専制に対する反対、たとえば独立宣言に表現されてい

るような主張の支持) がからみあった形でフランスの大衆のなかにシントーしたこと、それに障碍のすくない新大陸での革命の実験が、旧大陸での困難な革命の実行にたいして、多くの教訓と訓練のチャンスを与えたこと、などの点において、大事な政治的、思想的イギを、フランス革命に対してもっていると思います。こうした点は、この戦争に参加することによってフランス絶対主義政権のうけた財政的打撃とならんで、正しく評価されねばならないと思います。アメリカ独立戦争を個人研究のテーマとしてきた樋口さんなどにぜひ明かにしてもらいたいことがらです。

### (三) 革命のイデオロギーについて。

明治維新における「尊王攘夷」にあたる中心的な革命スローガンをフランス革命にもとめれば、それは、「反専制主義」というコトバに要約できると思います。これはいづれも革命勢力の反抗権を正当化するための原理を表現したものとみてよいでしょう。では、その原理の基本的性格は何か、というと、「尊王攘夷」の場合は、会沢正志の『新論』に代表される儒教的「名分論」であり、「反専制主義」の場合は、ルソーの『民約論』に代表される近代的「自然法思想」である、と考えるとよいのではないのでしょうか。

ともかく、それぞれの政治的スローガンが、革命直前におこった特殊な対外問題を契機として、革命勢力の組織化の原理に転化していることは注目に値すると思います。日本の場合は、日米通商条約の調印(1858)、フランスの場合は、アメリカ独立戦争への参加(1778)です。条約調印のときまで、「尊王攘夷論」は、將軍の御三家の一つである水戸藩を中心として、外には封建的排外主義、内には封建的反動の役割しかもっていませんでしたが、調印以後は、まず雄藩諸侯を先頭とする幕府独裁修正の旗印となり、寺田屋事件(1862)、文久3年8月18日のクーデタ(1863)以後は、再転して下級武士の指導下における倒幕、王政復古の旗印となり、急速に革命的なイミをおびるにいたりました。同様な事情を、アンシャン・レジーム末期における「反専制主義」の展開過程にもみることができるのではないのでしょうか。その点、私はちゃんとたしかめてはいないのですが、「反専制主義」のギロンが、貴族や上層ブルジョアのサロンをにぎあわす程度の状態から、革命勢力結集のスローガンにまで転化するキッカケとして、アメリカ独立戦争への参加(米佛同盟のテイケツ)ということを相当重視してよいのではないかと思います。7年戦争がすんで10年あまりにしかないフランス社会において、すくなくとも支配層においては根深い対英憎悪が尾をひいていたことは十分に考えられることであり、そうしたおりに、共通の敵であるイギリス王権政府に対して同盟国アメリカのかざす戦争理由、すなわち「独立宣言」は、自国の啓蒙思想に対する観念的な共感と相呼應して、支配層をもふくめて歓迎されたに相異ないと思います。これは、反専制主義の主張が、支配層の公認のもとに、国民大衆にシントーする機会を与えたにちがいません。ふつうボンポドゥール夫人が勢をふるって啓蒙思想家たちを保ゴした期間(1745~64)、これにかさなるマールゼルブが出版活動を大目にみた期間(1750~65)が、革命思想の普及のチャンスとして重視されますが、フラン

ス政府のアメリカ独立戦争参加の期間(1778~1783)もこれに劣らぬ注目を要すると思うのです。イギリス王制批判という形で国民大衆のなかに残存する封建的排外思想とかみあう部分をもつだけに、独立戦争参加期間の反専制主義の論潮はより実質的な効果をもったのではないかと考えられさえします。ちょうど水戸藩を中心として封建排外と封建反動のネライで展開された尊王攘夷論が、倒幕運動のスローガンに転化しようなどとはユメにも思わなかった雄藩諸侯や上層公卿と同じようなオドロキを、戦勝によるフランスの貴族や特権的ブルジョワジーはあじあわねばならない運命にあったのではないのでしょうか。

明治維新において、革命のスローガンが「攘夷」という思想を表面におしだしたことは、さきほどのべた国内的要因に対する国際的要因の比重の重さ、(つまり外圧による旧体制の早熟的な破壊という特殊な事情)を反映するものとみてよいでしょう。それが「尊皇」とむすびつくとき、国内体制の変革、つまり倒幕・王政復古、の方向が同時に暗示されていたとも考えられます。雄藩諸侯や上層公卿は、「尊皇」によって、公武合体、つまり天皇の権威と幕府の権力のダキアワセ、をリカイしていた訳ですが、維新の主体となった下級武士たちは、同じコトバによって、幕藩体制から天皇制へ、という権力の移動を考えたのです。この権力移動、つまり将軍から天皇へのバトン・タッチは、フランス革命の場合についていえば、専制君主から立憲君主へ、というシェーエスやミラボーの考えていた革命目標に対応します。フランスでは、王の逃亡(1791・6・20)を転機としてこうした権力移動は、ロベスピエールやダントンの指導によって、立憲君主制から共和制へという更にすゝんだ革命目標におきかえられ、やがてそれが実現されたのですが、日本では、自由民権運動がジャコバン左派の運動と対応する役割をもちながら、フランスの場合とは反対に敗北をキツし、新たな権力移動を実現しえませんでした。明治維新において、将軍→天皇という権力移動の運動を指導した中心人物は、大久保と西郷です。これは、フランス革命において、専制君主→立憲君主という権力移動(後者は人民主権の前提にたっていました)の立役者、シェーエスとミラボーのコンビに対応するとみてよいでしょう。(岩倉とネッケルという機能上の対応を考えてもよいと思いますが、これはさほど大切とは思いません。)なお、憲法議会がまっさきにとりあげた「人権宣言」は、王政復古のクーデタ直後に新政府の発表した「五ヶ條の誓文」に対応するとみてよいのではないのでしょうか。まことに、悲しい対照ですが。ロベスピエールとダントンのひきいる山獄派は、板垣・大井にひきいられる自由民権派に対応し、テルミドールの反動は、自由民権シンパの大量公職追放と民権派のテッテイ的ダンアツの開始をイギづける明治14年の政変(明治12年と13年は民権ウンドーの頂点といわれています)に対応するものとみてはいけなないのでしょうか。ブリュメール18日をあえて保安條令の発動(明治20年)になぞらえるというところまではゆかなくとも、ブリュメール以後のナポレオン政権を、憲法発布(明治22年)以後の外見的立憲主義(伊藤と山県)の指導下における)に対応させることはゆるされるのではないのでしょうか。明治憲法をナポレオン憲法に対応させながら。以上にのべたアナロジーを図式的に表現してみましよう。

## 【図 8】

明治維新をフランス革命とのアナロジーで考えることには、異論をさしはさむ人がきつと多いことと思います。それは、明治維新を絶対主義（封建末期の専制王制）の成立としてとらえ、そのブルジョア革命的性格を否定するギロンが、とりわけ戦後の日本では、維新史学の主流をなしているように思われるからです。しかし、私は、こうした考えに異論をもっているのです。

むかしの人は、明治維新を漠然とフランス革命みたいなもの、つまり一種のブルジョア革命として考えていたのではないのでしょうか。大正 10 年に、堺利彦は『維新史の新研究』という論文で、明治維新をブルジョア革命と規定し、イギリスやフランスの革命と比較してその特質を明かにした、ということですが、羽仁五郎さんも、戦争中（昭和 15 年）にかいた『明治維新』という本のなかに、「わが国がその明治維新元年の 1868 年以来新たに一の近代国家として誕生し、・・・独立宣言以来のアメリカまた 1789 年以来のフランスなどと、ひとしく新時代に進む新年令をかぞえることを得るに至った」(p.51) とかいています。また、労農派の人々が明治維新を、基本的には、ブルジョア革命として規定していることは周知の事実です。

明治政権を絶対主義政権として最初にはっきり規定したのは服部之聰さんの業績（『明治維新史』昭和 3 年）だといわれていますが、大体、コミンテルンの 27 年テーゼ（昭和 2 年）あたりをきっかけとしてこうした論議が生れたのではないかと思います。それが『資本主義発達史講座』（昭和 7、8 年）あたりで補強され、（これは 32 年テーゼとかかわりがある訳です）戦后においては維新史の主流となったのではないのでしょうか。とりわけ、堀江英一さんの理論など、そうした事情のなかで成長した極端な形態の一つだと思います。彼は、「明治元年戊辰戦争は、イギリスにおける 1485 年のテュードル王朝の成立にひとしく、絶対主義天皇制の出発点にすぎなかった。」（『マニファクチュア論』 p.114）といっていますが、これはすこし暴論ではないか、と思います。なぜなら、明治維新が、マルクスも指摘しているように、世界市場の成立をイギづける事件であるとすれば、世界市場の成立がヨーロッパの産業革命を原動力とし、産業革命がブルジョワ政治革命によって可能にされもしくは促進されたものであり、また、世界市場成立以後のアジアの国々の歴史が、少なくとも経済、政治、軍事などの重要な部分に関してヨーロッパの近代史の文脈にくみこまれてきたのであるかぎり、明治維新によって成立した新政権を、ブルジョア政治革命や産業革命以前におけるヨーロッパの一国の政治形態の型にリジッドな仕方であてはめてとらえることは理論上の暴挙ではないか、と思われるからです。日本の場合、封建制度の内部的矛盾が十分に成熟しきらないうちに、先進資本主義諸国の圧力によって、早熟的に旧制度のカラを破らねばならないハメにおちいったので、封建制から資本主義体制への過程をもっぱら内発的に展開しえた西欧先進諸国にみられるような、絶対主義という過渡的政治形態は、すくなくとも古典的な様式においては成立しえなかったのではないか、と私は考えています。ともあれ、明治維新においては、ヨーロッパのブルジョア勢力の外圧が内乱の要因に

転化する、という現象が、経済や政治の面だけでなく、洋学者たちの活動を通じて、思想の面においてもはっきりとみとめられるので、幕府打倒の運動は、ブルジョア革命における絶対王制打倒の運動に、むしろ相通じる点をもっていたのではないかと私は考えています。したがって、私は、フランス革命の研究からひきだされた作業仮説を、できるだけユトリのある態度で、つまりひどいクイチガイを充分勘定にいったうえで、明治維新の研究に活用することは可能ではないか、またあるいはその逆も可能ではないか、と考えているのです。こうした観点に立つとき、明治維新を絶対主義の成立として規定しようとする人々の仕事は、古典的ブルジョア革命からひきだした仮説のリジッドな適用をチェックするための有効なブレーキの役目を果たすでしょう。しかし、結果においては、維新史の過程におけるブルジョア革命的要素を、かなり重視することになるのではないかと、思います。

書きながしてゆくうちに、いろいろのアイデアがむらがりわいてきて、筆がとまらなくなってきましたが、この辺で、ひとくぎりつけることにいたします。

相当、ひとりよがりのイケンが多いことと思いますが、「共同研究」の推進にすこしでも役立てば幸だと思えます。

なお、このレポートは、書きおえてみるとすこし愛着ができましたので、用済み後、返していただければありがたいと思えます。

1955.1.14

上山春平